
無限の世界で旅をする

ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限の世界で旅をする

【Nコード】

N7080Z

【作者名】

ソラ

【あらすじ】

ここは、有りえるかもしれない世界が街として存在し、無限に集約されている世界。物語の主人公は、そんな世界にたった今生まれただばかりの少女。少女の物語を淡々と紡いでいきます。

はじまり

唐突に、意識が覚醒した。

いや、意識が生まれたというのが、正しいかもしれない。何故なら別に寝ていたわけでも、気を失っていたわけでもないからである。そのような記憶も無いし、そもそも自身の記憶というものが全く無い。しかし、そのことを不思議に思うことは無かった。たった今自分が生まれた事を、何故か理解していたからである。そして自分は生まれた瞬間から多少の知識を持っている。何故理解し、知識を持っているのかは謎である。

「ここは……？」

薄暗くてよく見えないが、かろうじて見えるのは目の前の大きな女性の石像。どうやら自分が生まれたのは、この石像が抱えている器の中のようだ。

つまりこの石像が母親ということだろうか？

そんなことを考えていたら不意に、誰かの声が響いた。

「へえ、今回はずいぶん可愛いらしい子が生まれたね。白い髪に青い瞳、とても綺麗な色だ」

「え？」

誰も居ないと思っていた部屋から、自分以外の声があることに驚いて声のした方を向いてみると、そこには無精髭を生やした黒髪の男が胡散臭い笑みを浮かべてそこに立っていた。

いつからそこに居たのだろうか？ 全く気配がしなかったのは、この男が気配を消しているからだろう。

「自分がたった今生まれたことは理解しているね？」

「……うん」

「よし、それじゃあまずは自己紹介としようか。と言いたいところだけど、僕は君をどうしようという輩じゃないからあまり警戒しないで欲しいかな」

そう言われて初めて気づいたが、どうやら自分は無意識の内に反撃ができるように手を握り締めていたようだ。

まだ、若干の警戒心を持ちながら体の力を抜いた。

「好戦的なのは嫌いじゃないけどね。まあこんな見るからに怪しい僕が、いきなり目の前に現れたんじゃないかなあしょうがないかな」

全くそのとおりだと思った。生まれたばかりの自分に気配を消しながら近づいてきたのだ、問答無用で殴りかからなかっただけでも感謝してほしいものである。

というかこの男、自分が怪しいと自覚していてこんな真似をするなんて何を考えているのだろうか。

「僕の名前は泉だ。呼びかたは泉かお兄さんとも呼んでくれ」

「おじさんは、ここで何をしているの？」

「……まあいいんだけどね。僕は君のようにこの場所で生まれた子達の世話をしているんだ」

自分がおじさんと呼んだことには特に何も言わず、泉は苦笑いを浮かべながらそう言った。あっさりとおじさん呼ばわりされたことを許したと言うことは、もしかして言われ慣れているのだろうか？

「私みたいにここで生まれた子が他にも居るの？」

「そのとおりだよ。みんなもうこの世界を旅しに行ってしまったけ

どね
「そうなんだ」

自分以外にこの場所で生まれた子というものに、多少興味が惹かれたが近く居ないのならしょうがない。生きていればその内会つこともあるだろう。

「それで君の名前は何というのかな？」

「私の名前……？」

「そう、名前だ」

普通は、生まれたばかりで名前などわかるはずも無いのだが。何故か自分の名前が頭の中に浮かんできた。どうしてそれが自分の名前だと思っただのかはわからないが、自然にその名前を口に使っていた。

「私の名前はなまえ」

「栗ちゃんか、それじゃあ自己紹介も済んだことだしそろそろ行くか」

「どこへ？」

「君がこれから住む場所だよ」

目の前の男はやはりどこか胡散臭い笑みを浮かべてそう言った。

「といっても、行くのは僕の家なだけどね」

「おじさんの家？」

「そうだよ。ああそういえば、僕としたことがうっかり言い忘れていた」

「……？」

「おめでとう、さっちゃん。その世界へ。僕は君を祝福するよ」

1話

「さて、まずはこの世界について話そうか」

その後、泉に連れられ泉の家までやってきた。

自分の生まれた建物は、森の中にある小さな神殿のような場所だった。外観は崩れないのが不思議なほどボロボロで、よく今まで形を保っていられたものだ。

泉の家はそんな神殿のすぐ裏にポツンと建っていた。こんな人気の無い森の中に、大きなログハウスが見えた時は驚いた。しかもこのログハウス、泉が一人で建てたというのだからさらに驚きだ。

「この世界にはね、色々な街があるんだ。しかもその数が膨大でね、なんでも街の数は今も増え続けているそうだよ。聞いた話によると気づいたらそこに有って、誰も街が増えた瞬間を見た人は居ないらしいね」

どうやら自分の生まれた世界は、中々に面白そうな世界のようにだ。

「そうそう、面白いことに街と一緒に土地も増える時があるらしいよ。おかげでこの世界の正確な地図を描くことは不可能とまで言われているんだ」

「なんだか面白そうな世界なんだね」

「実際に面白い世界だよ、それで痺ちゃん。こんな世界に生まれた君は今後どうしたい？」

「面白そうだから世界の色々な街を見てみたい」

「即答か、良いねスパッと決めてくれて僕もありがたいよ」

楽しそうなことなら当然興味も沸く。自分の知らない事を知った

時楽しいと感じたので、世界を旅して周るなんてとても楽しそうだ。

「でも一つ問題があるんだ。この世界には魔物が生息していてね、下手をすると1つ目の街に着く前に魔物の腹の中、なんてこともありえる話なんだよ。なんの対抗手段も持たないで世界を旅するなんて自殺行為だ」

「大丈夫、邪魔をされたら殴り倒すから」

「君ならやりかねないね……。それでも一応君のことを鍛えてあげようと思っていたんだけどどうかな？」

「泉が？」

「そうだ、君さえ良ければ僕が師匠になってあげるよ」

確かに自分は生まれたばかりなので戦闘の知識も経験も無い、別に断ることはないだろう。

むしろ願ったり叶ったりだ。魔物に食べられるなんて絶対に御免なので、多少は鍛えておいたほうがよさそうだ。

「うん、よろしくお願いします師匠」

「よしわかった。といっても君は既にそこそこ強そうだから、僕が教えるのは基礎部分だけでも大丈夫だと思うけどね」

「そうなの？ 自分ではよくわからないけど……」

「僕は見ただけで、ある程度どのぐらい強いのかわかるからね。君は相当強くなれると思うよ」

割と凄いことを言っている気がするが本当だろうか……？

しかし、泉ならばありえるかもしれないと思ったのでそこは流しておいた。

「それじゃあ夕食にしようか、準備をしてくるから適当にくつろいでいて良いよ」

「うん、ありがとう師匠」

さて何をしていようか。周りを見回してみると、部屋の隅に本棚を見つけた。

その中の興味が惹かれた本を1冊手に取ってみる。夕食が出来るまではこの本を読んで時間を潰していよう。

「準備が出来たよ雫ちゃん。おや、本を読んでいたのかい」

師匠に呼びかけられ気付いたが、自分は結構長い間熱中して読んでいたようだ。

さくさくと読み進められたので、結構なページ数を読んでいた。あまりに集中して読んでいたので、時間があつという間に過ぎていた。

「この本面白いね師匠」

「気に入ったかい？ その本はこの世界に実際に存在する街をモデルに書かれているらしいよ」

「そうなんだ。じゃあ旅をしていればこの本の街に行ける？」

本の中の街が実際にあるという夢のような話を聞いて、期待を込めて聞いてみる。

「運が良ければね。なにせこの世界は広いってものじゃないから知っている街に行くのにも一苦労だ。知らない街に行こうなんて考え

ると、相当運が良くなければ無理じゃないかな」

「なんだ……。師匠はこの本の街に行ったことがあるの？」

「残念ながら僕も行つたことは無いね」

行くのが難しいと聞いて落胆したが、絶対に行けないわけではな
いらしいので旅をしていればそのうち辿り着けるだろう。これは旅
の楽しみが一つ増えた。

師匠の持ってきた料理を覗いてみると、そこには先ほどまで自分
の読んでいた本に出てきた料理と似ている物があった。

「これってさっきの本に出てきたやつ？」

「よくわかつたね、作り方が本に書いてあつたから作つてみたらこ
れがまた美味しくてね、それ以降料理をするのが趣味になつたぐら
いだよ」

料理が趣味と聞いて驚いた、この見た目で趣味は料理ですなんて
言われたら思わず笑つてしまふそうだ。というか、実際に笑つてし
まつた。

こんなどうみても料理をするとは思えない男が、「趣味は料理で
す」なんて言つたら笑つてしまうのもしょうがないだろう。

「それって、私にも作れる？」

「そうだね、旅をするのに料理のスキルも必要だろうから教えてあ
げるよ」

「楽しみにしてる」

笑つてしまったのを気にもせず師匠は約束をしてくれた。似合
わない事を言っているのは自覚しているのだろう。

「よし、料理が冷めないうちに食べようか。料理は出来たてが一番

だからね
「

うん
「

「明日から修行を始めるからいっぱい食べておいたほうがいいよ
「

2話

翌日、日も昇らないうちから起こされ軽く朝食を取った後、師匠に連れられ森の中の少し広めの広場に來ていた。

まず最初に魔法を教えてくれるらしい。

それなりの広さがないと危険という理由で、ここまでやって來た正直、あんな朝早くから起こすのは勘弁して欲しかった。

なんでも、修行というのは朝早くからやるもの、と言って無理やり連れ出された。

「それじゃあまずは基本から。魔法というのはイメージが重要なんだ。なんでも良いから魔法というものをイメージしてみようか」

そんななんでも良いと言われても……。

いきなりやったことも無いのにイメージしろだなんて期待されているのか、それともただ単に詳しく説明するのが面倒だったのか……。師匠のことだ、おそらく後者なのだろう。

もっと具体的に説明しろと文句を言っただけだが、起きたばかりで口を開くのが面倒だったのでやめた。

しょうがないので、言われた通りに魔法といものをイメージしてみよう。

魔法といえば昨日読んだ本にも魔法が登場していた。

あの本に出てきた魔法は確か。

「指先に水を集中させて圧縮」

指先が青く光ったと思うと、物凄い速度で圧縮された水が地面に向かって飛んで行った。

まさかいきなり出来るわけがないと思っていたのだが、成功させ

てしまったようだ。

「……驚いたね、1発で成功させるなんてやるじゃないか。まさかあれだけの説明で出来るとは思わなかったよ。それにこの威力は凄いな、生き物に撃つたら軽く貫通しそうだ」

やはりさつきは説明が面倒くさかったただけのようだ、後で1発殴っておこう。

自分が撃つた魔法はかなりの距離、地面を抉っていた。少し威力が強すぎたらしい。

イメージしたのは水の弾丸。手で拳銃の形を作り指先から弾丸を撃ちだす感覚で水を発射してみたが、まさかこんなに威力が高いとは思ってもみなかった。

「それじゃあその調子で、どんどんやっていこうか」
「うん」

次は何をイメージしてみようか。

水の弾丸は、本に出てきたものを真似しただけなので、ここにアレンジを加えた魔法を考えてみるのも良いかもしれない。

そこで、さつきは水を撃ちだしたが、今度は弾丸を氷にしてみることにした。どうせなら先端を尖らせて貫通する力を強くしてみよう。

先ほどのように手を拳銃の形にしようとしたが、これでは手が塞がってしまうことに気付いた。

実戦を想定するのならば、手は自由に動かせたほうが良い。

手を使わずに魔法を撃てるように、自分の正面から魔法を撃つイメージしてみよう。

「君の才能は恐ろしいね、零ちゃん」

時折師匠にアドバイスを貰いながら魔法の練習をしていた時、そんなことを言われた。

「そんなに凄いかな？」

「凄いよ。普通はこんなにすぐに、魔法を使いこなすなんて出来ないんだけどね」

そんなことを言われても、出来てしまうものは仕方がない。

自分にとっては、苦もなく簡単に出来てしまうことなので、凄いと云われてもいまいち実感が湧かない。

「これならもう、実戦形式の修行をしても大丈夫かな」

刹那、身体全体が震えるほどの寒気に襲われる。

嫌な予感がして、咄嗟に無理矢理、全力で身体を横に動かした。

「不意打ちは卑怯だと思っよ師匠」

「何を言っているんだい？ 実戦じゃあ敵は待ってくれないよ」

この男、どこに隠し持っていたのかは知らないが、突然殺気と共にナイフを飛ばしてきた。

実戦での不意打ちに対応出来るようにするためなのだろうが、いくら修行とはいえ完全に油断している時に、当たったら只では済まないような物を飛ばしてくるのはどうなのだろうか。

「ごめんごめん、君なら避けられると思ってね。まあこうして避けられたんだから良いじゃないか」

「そういう問題じゃないよ師匠」

「じゃあどうい問題なんだい？」

決めた、絶対に師匠をぶん殴る。

師匠ならば手加減は要らないだろう。いや、手を抜いている暇などないと言ったほうが正しいか。

今の攻撃、間違いなく全力で避けた。

それなのに、頬には薄く切り傷が残っている、完全には避けきれていなかったのだ。

多分、ギリギリ避けられるように計算して攻撃してきたのだろう。これが全力だったら恐らく自分は既に死んでいた。

「殴って良いよね師匠？」

「出来るならね。そうだな実戦形式だから、勝ち負けの条件をはっきりさせておこう。日が落ちるまでに君が僕に1撃でも攻撃を当てられたら君の勝ち。出来なかったら僕の勝ちだ。どうだい？ シンプルでわかりやすいだろう？」

「そんなのどうでも良い、絶対に殴る」

「おお恐い恐い。ちなみに今の攻撃は手加減してあげたけど、次からは本気でいくから覚悟を決めておいてね。殺してはしないけど、多少の怪我くらいはさせるよ」

上等だ、明らかに手加減されていては自分の気が晴れない。

それに本気の師匠と1対1で戦うのはとても面白いだろう。

明らかに自分より強い者の、今すぐにも膝を付いてしまいそうなほどの殺気を前にして、自分の戦闘意欲が高まっていくのを感じた。

「それじゃあ。行くよ！」

強大なる力を持つ、2人の師弟の戦いが幕を切って落とされた。

3話

「それじゃあ先手必勝ということできなりのかせて貰うよ」
「望むところ」

そう言った師匠は、大量のナイフをこちらに飛ばしてきた。どうやらさっきのナイフも魔法で作って飛ばしてきた物のようだ。しかしこの魔法、まるで巨大な剣山が襲ってくるようだ。ナイフの壁と言っても良い。

こんなものを常人に使ったら、一瞬のうちに人間ハリネズミの完成だ。

目には目を、壁には壁を。

そう判断し、氷の壁を目の前に出現させる。

「へえ氷で防ぐとはやるね。でもまだ甘いかな」
「え？」

耳が壊れそうになるほどの轟音と共に氷がどんどん削られていくが、このナイフはどれだけ威力が高いのだろうか？

あっさりと氷の壁を破壊されて、少し驚いた。

どうやらあのナイフを前に防御は意味が無いらしい。

それならばと、今度はナイフと共に空間を凍らせてみる。

「おお！ やるじゃないか零ちゃん」

今度は上手くいったようで大量に襲ってきていたナイフは動きを止めていた。

師匠は笑顔で拍手をしている。

そんな師匠にイラっとしたので今度はこちらから攻めることにした。

「今度はこっちから行くよ師匠」

手に魔法を纏い、高速で接近する。

的確に死角から襲ってくるナイフなど物ともせず、全て殴り飛ばした。

殴り飛ばしたナイフは、自らの手に纏った氷の魔法によって氷のつぶてとなる。

そのつぶてが師匠を襲うが、笑いながら蹴りで撃ち落とされた。

しかし、それで充分。

元々あんな攻撃、牽制以上の意味を持たない。師匠の気が少しでも逸れればそれで良いのだ。

「凍りつけ！」

ナイフを切り抜け、師匠の腹に向かって思いっきり拳を突き出す。

「残念、はずれだよ」

「……あれ？」

自分の拳は確かに師匠に当たったはず。

殴った感触も確かにある。

しかしなぜ、師匠は無傷で元居た場所の遥か後ろに立っているのだろうか？

そして、自分は何を殴ったのだろうか。

「それ、気を付けないと危ないよ」

次の瞬間、世界が白く染まるほどの閃光と共に目の前が爆発した。

「変わり身の術つと。見事に引つかかったね雫ちゃん」

師匠は悪戯が成功した子供のように笑っていた。

咄嗟に氷の盾を作り防いだが、完全には防ぎきれなかった。多少の傷を負ってしまったが、まだ動ける。

「騙された……。でもまだまだいけるよ師匠」

氷の矢を大量に作り、弾幕を放つ。

ちようどさつき、師匠がやってきたナイフの壁の氷版だ。

「おっと」

師匠は手を前に突き出すと、巨大な炎の塊を作りだした。

その炎の塊によって師匠を狙った氷の矢を全て溶かされてしまった。

「凄いけど僕には効かないかな」

あつさりと対処されてしまった。

しかし、これがダメなら別の方法でやればいい。

「それじゃあこんなのはどう？」

師匠を包囲するかのようには水の弾丸を設置し、それと同時に頭上には大きな水の塊を作る。

「これは凄いね水の包囲網か」

「いくよ師匠。 発射！」

設置した水の弾丸全てを発射。

その一つ一つが人体を破壊しかねない威力を持った水が師匠を襲う。

しかし、どうやら師匠に一撃を与えるにはまだまだ足りないらしい。

その全ての弾丸をことごとく避けられていく。

「……なんで避けられるの？」

「それは僕だからね、弟子に負ける師匠なんて格好悪いから意地でも勝たせて貰うよ」

「そう、まだ終わらないよ」

弾丸は避けられたがまだ自分にはまだこれがある。

弾丸を避けている師匠に、頭上に設置した水の塊を高速で落下させる。

水のハンマーをイメージしたそれは、当たれば人間などミンチになるだろう。

「はっ！」

しかしその通りにはならなかった。

師匠の炎の龍を模した魔法が、水を飲み込みそのまま蒸発させてしまったからだ。

しかもそれだけでは終わらなかった。

水を飲み込んだ炎の龍がそのままこちらを襲ってきた。

「っ！」

水でガードするがさすがに防ぎきれず、直撃を受けてしまった。圧倒的なまでの炎に全身を焼かれる。

「あの程度じゃあまだ僕に一撃を当てるのは叶わないかな。でも気にしないで良いんだよ、君が弱いんじゃないよ。僕が強いだけだから」

確かに師匠は強い。

師匠以外に会ったことは無いが、師匠が強くないのならこの世界の人々は人間以外の何かだ。

しかし、だからどうだと言うのだ。

それにまだ日が落ちるまでは時間がある、それならばまだ負けてはいない。

身体にはあちこち火傷があるがそんなもの気にすることは無い。

「……まだまだ」

「おや、まだ立つか。というかそんな火傷で良く動けるね」

「気合い」

「気合いでなんとかかなるような火傷じゃないはずんだけどね。やつぱり君は凄いね」

「それにまだ師匠を殴って無いしね」

「まだ根に持ってたのかい？ でもそろそろ日も落ちるし次で終わりにしようか」

確かに辺りが暗くなってきた。

次で一撃を決められなければ負ける。

ならば次の攻撃に全てを賭けよう、後のことはどうでもいい。

自分が出せる最高の威力を持つ魔法をイメージしよう。
師匠の周りを囲うように巨大な水の渦を発生させる。
圧倒的な質量を持つ水ならば、炎の魔法で蒸発しきることは出来ないはずだ。

「確か君に魔法を教えるから半日も経ってないはずんだけどね。
つくづく君には驚かされるよ」

「ありがとう、でも褒めたって手加減しないからね」
「そんな必要は無いよ」

そう言っていると師匠は、自分の周りに炎のドームを発生させた。

「この炎を突破することは出来ないからね」

「……じゃあ試してみようか」

そこまで言うなら防ぎきる自信があるのだろう。
だが自分もこの魔法には自信がある。
戦闘中に考えたとおきの魔法だ。
いくら師匠の魔法でも、この質量の水を防ぐことは出来ないだろう。

「いくよ師匠、後悔しないでね」

「いつでもどうぞ」

水の渦を操り、炎のドームを飲み込む。
これで水が勝てば自分の勝ち。炎が勝てば負ける。
負ける気など微塵も無い。

そう自分を奮い立たせ、全力で魔法を行使した。

「やった……？」

大量の水が蒸発したことによって、視界は白く包まれている。何も見えないせいで、師匠がどうなったのかわからなかった。

そのせいで反応が遅れた。

「知ってるかい。やったか？ っていうのは魔法の言葉でね、その言葉に類する言葉を発した時には大抵相手を倒しきれないんだよ」「けほっ……。覚えておくよ師匠」

どうやったのかは知らないが、いつのまにか師匠は後ろに回り込んでいた。

後ろを振り返ったは良いが、その際に腹に思いつきり打撃を貰い、吹っ飛ばされて地面に叩きつけられてしまった。

元々のダメージも相まって、立ち上がることは出来なかった。

「負けちゃったか……」

「いや、君の勝ちだよ」

「……え？」

「君の魔法から抜け出す時に一撃貰っちゃってね」

そういつて腕を見せてきた。

確かに、少しだが傷が出来ている。

「じゃあ最後の攻撃は……？」

「ああ、殴ったのはノリだよ。」

「……私起きたらもう一発殴るね師匠」

「アハハ、ごめんごめん。何はともあれおめでとう、ちゃんと家に運んでおくからゆっくりお休み」

11の日の記憶は1111で途切れている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7080z/>

無限の世界で旅をする

2012年1月5日00時47分発行